

27 『鍼灸拔翠』について

宮川隆弘

江戸時代に鍼灸入門書として、刊行されたものの中で、諺解書で比較的古いものとして『鍼灸拔翠』がある。本書については論文でもしばしば見られるが、未詳の部分が多いので、一連の検討を行った。

著者未詳。縦二六・五cm×横一九cm。全五冊。第一冊目。序文一丁、目録一丁、上巻本文二八丁、全三〇丁。第二冊目。目録なし。中之上巻本文二二丁。第三冊目。目録なし。中之中巻本文二一丁。第四冊目。目録なし。上之下巻本文一七丁。第五冊目。下巻目録二丁、本文二七丁。全二九丁。以上のように構成されている。版本として現在確認されているもので、延宝四年（一六七六年）本及び延宝八年（一六八〇年）本及び貞享二年（一六八五年）本がある。

第一冊目の上巻は、鍼灸の基本的な事柄について述べ

られている。望問聞切、脈、腹診、刺鍼方法、灸の製法・方法、九鍼についてなどが一八項目に分けて述べられている。上巻の内容は、各項目とも半葉から一葉の著述であるに過ぎなく、入門書としては不備が多く、内容的にも未完成であることが窺える。しかし、第一三丁表一二行目から第一八丁表一二行目までで当時行われていた刺鍼方法が述べられている。その中に管鍼法の記述があり、現在確認されている管鍼法の記述としては最も古い掲載である。杉山和一が慶長一五年（一六一〇年）に生誕して、六六歳の延宝四年（一六七六年）には管鍼法は相当普及していたものであると考えられる。本内容はこれまでよく議論されていた貞享二年（一六八五年）刊行の本書及び『鍼道秘結集』、岩田利斎『鍼灸要法』よりも九年古く、杉山和一の管鍼法発明に関して一石投じる事柄であると考えられる。今後更に検討が必要である。

第二冊目から第四冊目までは、各部位の経穴及び主治、刺入深度、灸の壮数などが述べられている。本内容は頭面、心腹（第二冊目・中之上巻）、肩背、肘手（第三

冊目・中之中巻)、腿脚(第四冊目・中之下巻)と分類されて説明されている。しかし、上述の分類を更に詳しくしたものではなく、経絡や一行線、二行線といった小項目はみられなく、無作為に経穴名を挙げて説明しているに過ぎない。また、全経穴を説明したわけではなく、代表的なものを挙げたのみであるが、主治、刺入深度、灸の壮数は別の医学書と対照して述べられていることが大きな特徴である。

第五冊目は下巻之上・下に分けられ、病症の説明及び治療穴が述べられている。引用書としては『内経』ニイワク」または『素問』に曰」などがまれに見られる程度でどの引用から説明がされているのかがみられない。治療穴は挙げられているが、鍼灸をすべきであるのかは述べられていない。

本書は確認された版本からみても当時相当普及していたものであると考えられるが、不備な点も多いことがしばしばみられる。この点については、元禄一二年(一六九五年)刊行の岡本一胞子著「鍼灸拔翠大成」の序文に「『鍼灸拔翠』の欠略誤謬が多く…」とある。また、『鍼

灸拔翠』の内容をそのまま小冊子にして補足の追加内容を添付した元禄八年(一六九五)刊行の『廣益鍼灸拔翠』には末尾に関連のペンネーム、追加部分の冒頭に岡本一胞子の名前が見られることから、『鍼灸拔翠』の著者は岡本一胞子であることは間違いないことである。

『鍼灸拔翠』は岡本一胞子初期の著作で不備が多く、京大付属図書館に脈法についての鈔本がみられることから、内容が充実している鍼灸診解書の名著『鍼灸拔翠大成』の原基となる著作であると考えられる。

(岐阜県鍼灸師会、日本鍼灸研究会)